

白金蔭

6月号



平成 27 年 6 月 発行

第 52 号

白金葭定例句会案内

月例句会報（'45／6／19 10名欠1）（グラジオラス、鮎）

七月十七日(金) 12:00～15:00 ア第一 兼題：鬼灯市、日盛

八月六日(木) 10:00～17:00 吟行句会(西新井大師→炎天寺)

九月十八日(金) 12:00～15:00 ア第三 兼題：愁思、落鮎

鬼灯市、日盛の参考句(七月十七日分)

水を買うほおづき市のうら通り

鬼灯市や子規に恋の句あればなあ

鬼灯市夕風のたつところかな

炎立つ四万六千日の大香炉

鬼灯市雨あをと通りけり

よき人に逢ふは別れの鬼灯市

降りつづき四万六千日となる

四万六千日水満々と隅田川

日盛りに蝶のふれ合ふ音すなり

日盛りの穴を覗きて鳴る耳輪

腰太き南部日盛農婦かな

正装の鴉が歩く日の盛

日盛や凌霄おごる松の上

日盛やおのが影追ふ蓬原

日ざかりや青杉こぞる山の峠

日盛やがんぎ伝ひに染屋入

咲きのぼる十花一列グラヂオラス
鮎の腸わたススル一献下戸デガス
江戸前の鮎の放流山深し

泣かすなよお下げ髪の子グラヂオラス

天花粉まんづ噴水見舞はれし

昔日の吾も闇なり椎の花

梅雨晴間木更津谷地に竹乱れ

グラジオラス揺らさず通る神経科

潜る児の肢体も混り鮎の淵

湾岸に浅蜊口開く路線バス

名久井清流

葭切の声聞く朝な夕なかな

グラジオラス島の畑の隅にかな

釣られたる鮎に交代囮鮎

飯田蛇笏

芥川龍之介

中村七三郎

光成高志

水原秋桜子

栗原節子

松田ひろむ

岸田稚魚

永田裕子

西谷義雄

富士子

高志

吉田成子

成田千空

森鷗外

増田陽一

飯田孝三

グラジオラスアクセントはど、新教師
縄張りを守り守りて鮎釣られ

光 みち

グラジオラス口尖らせて数ふ子よ
川に立ち五体満足鮎を釣る
鮎釣れて水に膝つき鮎外す
水かかり驚きやすき蜥蜴の子
もぢずりの見返り美人摘みにけり

朝曇白鉢巻の祖母なりき
聖書説く戸ごとふたつの白日傘

松村幸一

ただ迅し流れも鮎もただ迅し
水を抜くしぶきとなりて鮎釣らる
桜桃忌今日とお菓子を食べながら
共に鮎釣りし誰彼天に帰し
帆が傾ぎ男傾がすヨツトかな

武者昭七

連嶺れんれいの白雪はくせつはるか遅桜
順番に下から咲いてくグラジオラス
ほろ苦き味のうれしや鮎の腸わた
天空の高みの花や朴の花
とべら咲く岬の森や古社ふるやしろ(真鶴岬)

浅野正美

倉田紀子

グラジオラス両手にかかえ友の来る

菖蒲園木札にするす源氏の名

枇杷うれて鳥に食べ頃教えられ

包丁の切れ味悪し朝曇

漢方薬にほとほと倦みぬ夏の風邪
手づかみの鮎少年の匂ひして

グラジオラス花つぎつぎと咲きのぼる

鮎の稚魚びちびち跳ねて放たれる

それぞれに鮎釣り装束締りおり

春雷や少年直立して尿る

水郷の麦秋モヒカン刈りのよう

田の神はいへ来て帰る蟾蜍

早苗東抛る筑波の峯に向け

神輿振るゝは昔の処刑場

雨に濡れグラジオラスは恋の花

田中にとそりと苦み鮎の腸

寝溜してこれより梅雨の俳句会

挿花の螺旋に雨滴連珠なす

選句結果
(数字は入選数)
左添書きは添削句)

4
早苗束抛る筑波の峯に向け

宏之助

青木啓泰

包丁の切れ味悪し朝暉	もぢずりの見返り美人摘みにけり
春雷や少年直立して尿る	ただ迅し流れも鮎もただ迅し
咲きのぼる十花一列グラヂオラス	咲きのぼる十花一列グラヂオラス
糠雨にこもりらつきよう漬けにけり	糠雨にこもりらつきよう漬けにけり
鮎つりの日がな竿さす思ひ川	鮎つりの日がな竿さす思ひ川
天空の高みの花や朴の花	天空の高みの花や朴の花
グラジオラス両手にかかえ友の来る	グラジオラス両手にかかえ友の来る
縄張りを守り守りて鮎釣られ	水を抜くしぶきとなりて鮎釣らる
グラジオラス島の畠の隅にかな	漢方薬かんぽうにほとほと倦みぬ夏の風邪
水を抜くしぶきとなりて鮎釣らる	漢方薬かんぽうにほとほと倦みぬ夏の風邪
水かかり驚きやすき蜥蜴の子	水かかり驚きやすき蜥蜴の子
菖蒲園木札にするす源氏の名	菖蒲園木札にするす源氏の名
咲きのぼるグラジオラスに明日を見る	咲きのぼるグラジオラスに明日を見る
昔日の吾も闇なり椎の花	昔日の吾も闇なり椎の花
桜桃忌今日とお菓子を食べながら	桜桃忌今日とお菓子を食べながら
田の神はいつ来て帰る蟾蜍	田の神はいつ来て帰る蟾蜍
手づかみの鮎少年の匂ひして	手づかみの鮎少年の匂ひして
さくらんぼのこりのひとつ子にゆづり	さくらんぼのこりのひとつ子にゆづり
葭切の声聞く朝な夕なかな	葭切の声聞く朝な夕なかな

紀子 みち 啓泰 けいた 幸一 こういち 孝三 こうぞう 多美子 もうみこ
昭七 しょうしち 正美 まさみ 高志 たかし 幸一 こういち 紀子 みち
正美 まさみ みち 多美子 もうみこ 紀子 みち 多美子 もうみこ
陽一 よういち 幸一 こういち 啓泰 けいた 紀子 みち 多美子 もうみこ
高志 たかし 幸一 こういち 啓泰 けいた 紀子 みち 多美子 もうみこ
高志 たかし 幸一 こういち 啓泰 けいた 紀子 みち 多美子 もうみこ

鮎の腸わたススル一献下戸デガス	孝三
ほろ苦き味のうれしや鮎の腸わた	昭七
鮎釣れて水に膝つき鮎外す	みち
鮎の稚魚ぴちぴち跳ねて放たれる	正美
それぞれに鮎釣り装束締りおり	啓泰
それぞれに鮎釣り装束締りをり	正美
順番に下から咲いてくグラジオラス	昭七
川に立ち五体満足鮎を釣る	みち
朝曇白鉢巻の祖母なりき	啓泰
グラジオラスアクトはどこ新教師	正美
連嶺れんれいの白雪はくせつはるか遅桜(信州伊那谷)	孝三
連嶺れんれいの白雪はるか遅桜	高志
共に鮎釣りし誰彼天に帰し	幸一
神輿振るここは昔の処刑場	昭七
江戸前の鮎の放流山深し	宏之助
湯の宿にまづ箸のゆく鮎の皿	多美子
聖書説く戸ごとふたつの白日傘	孝三
泣かすなよお下げ髪の子グラヂオラス	紀子
水郷の麦秋モヒガン刈りのよう	陽一
湾岸に浅蜊口開く路線バス	啓泰
雨に濡れグラジオラスは恋の花	陽一
梅雨晴間木更津谷地に竹乱れ	正美
枇杷うれて鳥に食べ頃教えられ	宏之助

一句鑑賞

江戸前の鮎の放流山深し

孝三

先日TV放映で多摩川に鮎の稚魚が遡上してくることを知りました。私は東京都大田区で生まれ育ちましたので、多摩川は身近に感じます。高度成長時代の汚染された川を思い出すと隔世の感があります。川に設けられた堰を越えられない稚魚の為に捕獲し上流まで車で運び放流する映像でした。私は元気に放流される姿を「鮎の稚魚ぴちぴち跳ねて放たれる」と句にしましたが、掲句は東京湾から多摩川に遡上し、新緑に囲まれた上流までの

浅野正美

5

グラジオラス搖らさず通る神経科
鮎焼いてランチタイムの道の駅
口中にとろりと苦み鮎の腸
帆が傾き男傾がすヨットかな
グラジオラス花つぎつぎと咲きのぼる
寝溜してこれより梅雨の俳句会
釣られたる鮎に交代囮鮎
天花粉まんづ噴水見舞はれし
グラジオラス口尖らせて數ふ子よ
潜る児の肢体も混り鮎の淵
捩花の螺旋に雨滴連珠なす
とべら咲く岬の森や古社(るやしろ)(真鶴岬)

昭七

宏之助

5

宏之助

5

高志

5

陽一

5

みち

5

正美

5

幸一

5

啓泰

5

陽一

5

正美

5

孝三

5

高志

5

みち

5

正美

5

幸一

5

啓泰

5

陽一

5

正美

5

孝三

5

高志

5

みち

5

正美

5

幸一

5

啓泰

5

陽一

5

正美

5

孝三

5

高志

5

みち

5

正美

5

幸一

5

啓泰

5

陽一

5

正美

5

孝三

5

高志

5

みち

5

正美

5

幸一

5

啓泰

5

陽一

5

正美

5

孝三

5

高志

5

みち

5

正美

5

幸一

5

啓泰

5

陽一

5

正美

5

孝三

5

高志

5

みち

5

正美

5

幸一

5

啓泰

5

陽一

5

正美

5

孝三

5

高志

5

みち

5

正美

5

幸一

5

啓泰

5

陽一

5

正美

5

孝三

5

高志

5

みち

5

正美

5

幸一

5

啓泰

5

陽一

5

正美

5

孝三

5

高志

5

みち

5

正美

5

幸一

5

啓泰

5

陽一

5

正美

5

孝三

5

高志

5

みち

5

正美

5

幸一

5

啓泰

5

陽一

5

正美

5

孝三

5

高志

5

みち

5

正美

5

幸一

5

啓泰

5

陽一

5

正美

5

孝三

5

高志

5

みち

5

正美

5

幸一

5

啓泰

5

陽一

5

正美

5

孝三

5

高志

5

みち

5

正美

5

幸一

5

啓泰

5

陽一

5

正美

5

孝三

5

高志

5

みち

5

正美

5

幸一

5

啓泰

5

陽一

5

正美

5

孝三

5

高志

5

みち

5

正美

5

幸一

5

啓泰

5

陽一

5

正美

5

孝三

5

高志

5

みち

5

正美

5

幸一

5

啓泰

5

陽一

5

正美

5

孝三

5

高志

5

みち

5

正美

5

幸一

5

啓泰

5

陽一

5

正美

5

孝三

5

高志

5

みち

5

正美

5

幸一

5

啓泰

空間を感じ、稚魚が藻を食し、成長する姿まで想像できます。作句に感じ入ると共に、『句を作ろうと見つめる』

とは単なる観察ではない、と大変勉強になりました。

追伸：みち様 グラジオラスとラベンダーありがとうございました。
部屋が明るく感じます。

一句鑑賞

糠雨にこもりらつきよう漬けにけり

多美子

作者とは、長いお付合いをして頂いている。地域のボランティアで、お弁当作りのチーフを長年つとめていた事もあり、特に料理は得意なのだ。私が夕食の献立に思案していると、温かいお裾分けが届き、本当に助けていた。この所、梅雨とは云え降りみ降らずみの様子が続いている。そんな日、主婦は家仕事に専念する。飴色になつた辣堇を食べる家族の顔を思い出しながら、保存食を作る。透明な広口瓶には、辣堇と鷹の爪が踊る。美しい！酢の香にまみれてふと気がつくともう夕暮れがきている。読み手は、薄くらやみの台所の白い辣堇や梅雨どきの甘酢の香りそして、母や妻を連想する事と思う。季語は動かず、糠雨を上五に置き、句に一層の重み厚みが加わった。大好きな句である。

一句鑑賞

ただ迅し流れも鮎もまだ迅し

幸一

今回、鮎の兼題を出しておいて、鮎や鮎釣りを知らずして作句するのはまずいと思い、酒匂川の鮎釣り現場を取材した。掲句の通りの情景を見た。水の流れが速く、見えなかつたけれども鮎も水中を迅速に上っているに違いないと思い、言葉の運びも迅速であり、こういう句は、句にはしりがある佳句と思い選句した。くり返し詞がくどくないのは、遠くから見て、速いなあという見立て、近くに来て流れも鮎もほんとに速いなあという感動が絶時的に陳べられているからである。タ・ダ・バ・ヤシナガ・レモ・ア・ユ・モ・タ・ダ・ハ・ヤシと一気に読め、母音のア音が11音もあって、天上の紺の下、川瀬の波の凹凸まで想像させる力がある。これは相当いい句だと思う。

水を抜くしぶきとなりて鮎釣らる

幸一

鮎を釣り上げる瞬間こうなる。私が見たのは、しぶきと共に鮎が光ることであった。圓鮎も一緒に手許まで寄せられて来る。もつとも水を抜かずに水中を寄せて水中で針を外すのかも知れない。鮎釣りのダイナミックな動きが目に見えるようである。

鮎釣れて水に膝つき鮎外す

これも鮎が釣れた時の動作を正確に書いてある。写生

光成高志

だけでは単なる絵であり、面白くないという見方があるが、それは短絡的見方である。大勢の釣人が川中に立つて竿を動かしている中に川底に膝をつけてしゃがんでいる釣人は釣果を外している喜びの中にあるのだ。見てゐる作者も喜んでいるのだ。總じて鮎釣りは、寒鮎つりのようなのんびりした釣ではなく、目も手も足も常に動かして鮎の動きを想像して鮎と神経戦を挑んでいる一種のゲームである。

一句鑑賞

武者昭七

早苗束抛る筑波の峯に向け

宏之助

まばゆいばかりの五月晴れだ。目の前に筑波山がそびえたつ。今日は一家総出の田植だ。苗は手渡しでは間にあわない。筑波山に向かつて力いっぱい放り投げるや空を切る早苗束を受け止めて素早く植え込んでいく。見る間に広がっていく青い苗の列。今は消えてしまった農村風景が懐かしい。

縄張りを守り守りて 鮎釣られ

高志

鮎は縄張り意識が強い。人間はその習性を逆手にとつて鮎をせしめる方法を考えた。友釣りである。するいのだ。「守り守り」と重ねたところに鮎の懸命さを、「つられ」にそれゆえの悲劇をとらえてみせた。作者は鮎に同情しているのである。ユーモアとペーススがにじむ。

昔日の吾も闇なり椎の花

陽一

椎はうつそうとした大木となり初夏には旺盛な葉を茂らせ香りの強い黄身がかつた小花をつける。大木になるだけにその下は深い木下闇となる。作者はその闇に自身の青春を重ねて昔の自分もこのようであつたと回想する。青春は夢や光明にばかり溢れてはいない。光の部分が輝かしいだけにそれが抱える闇もまた深いのである。作者はそれをみつめている。

もぢずりの見返り美人摘みにけり

みち

もぢずりは野原などにもよく見かける可憐な野の花。茎に身をよじるように螺旋形に花をつけるので「ねじばな」ともいう。「見返り美人」は有名な菱川師宣の肉筆浮世絵。切手にもなつた。可憐な野の花に豊麗な女性の絵姿を見たところが美的な感覚の冴えである。

手づかみの鮎少年の匂ひして

紀子

「匂ひ」は臭覚に訴えるものだけをいうのではない。色艶のあざやかに花やぐさまをいうのがもともとらしい。山桜の美を「朝日に匂ふ」などと言つていい。だから、「少年の匂ひ」とは少年の身が放つしなやかな美しさをいうと思いたい。手づかみした鮎が伝えてよこすはりつめた感触に少年の肢体だけが持つ弾みとはなやぎを感じたのだ。

糠雨にこもりらつきよう漬けにけり

多美子

時は梅雨、糠雨がふりつづき鬱陶しい。出歩くのも面倒、そうだ、いまのうちに辯菴を漬けよう。髪のような根毛を切り、洗い、薄皮を剥いで漬ける。思いの外手間隙かかるのだが、洗い立ての白さ目を射る実（錘形の鱗茎）が、特有の匂いと相まって梅雨の鬱氣を吹きはらう。終辞「けり」の外連なさがそれを語る。

春雷や少年直立して尿る

啓泰

春雷は啓蟄の頃に初めて鳴る雷。夏のそれと違つて激しきはなく、一つ二つで止むことが多い。天に兆す春気胎動のひびきを運ぶ。配する「直立して」が面白い。ご存知、ブリュセル生れの小便小僧の氣張り腰ならぬ、直立不動の姿勢なるべし。「春の雷湯殿に帶を解きおれば」（真砂女）「春の雷弱音を吐いて失せにけり」（立原道夫）。別に「田の神はいつ来て帰る蟾蜍」、「蟾蜍」の字面が絶品、面構えそつくり。御田大御神様に在すや。んにや、名代小田守蟾蜍命にぐわす。これはこれは御大役、御大義御大義。

包丁の切れ味悪し朝曇

紀子

「互選最高点の一つ。初め、朝「曇」に引っぱられ、切れ味「悪し」はつき過ぎと感じ、互選ではどれなか

つた。互選評を聞くうちに不明に気づく。「朝曇」は、朝靄をかぶつたように曇る夏の気象。それも朝のうちだけ、大抵はすぐに好晴となる。いわばその天然の機微に感じる一句なのである。「悪し」の切れのよさは、これも朝曇の特徴、昼頃から急に暑くなる気韻と交響するではないか。

神輿振ることは昔の処刑場

宏之助

千住大橋際の西南、奥の細道矢立初めの碑を置く、芭蕉縁の素戔雄神社の例祭である。神輿は、通称「二天棒」で曳く、揉むではなく、振る。神前を通る旧日光・奥州道（通称「コツ通り」）を南へ勇壮に振り、左折すれば小塚原回向院。「振る」は、斬首の白刃の閃きにも通い、ふと往時の荒涼の氣を想像させるのである。

川に立ち五体満足鮎を釣る

みち

「五体満足」は身体どこにも欠け損じないこと、健常体。「鮎を釣る」は友釣りだろう。ときには腰の上まで川水に浸かる、知命を過ぎた身には厳しい。それを厭わぬ丈夫な体を授けてくれた双親がいまさらに有り難い。同僚朋輩らは、次々、鬼籍に入る。他言無用、慣用の成句に語らせ余すない。脱帽。他に「もぢずりの見返り美人摘要にけり」、一読、「見返り美人図」（菱川師宣）の遊女が忽然と立ち現れる。ふうむ、「もぢずり」の風情は、げに件の美女を連想させる。可憐な花のよじりが艶あでな身の

振りを。むべ、捻花はつまみ心を揺ります。」「けり」の切り上げが粹である。

釣られたる鮎に交代囮鮎

鮎の友釣り、鮎の習性を利用した漁法である。掛針を

つけた生きた鮎を囮として放し、縄張り荒しと思ふこみ

挑んでくる鮎をひっかけて釣る。縄張りの苦はもとより命の綱、生への執着が仇となり、悲運、捕えられる。片

や囮鮎、ひきつづく応戦に疲労困憊、釣り上げられたばかりの鮎に入れ替わる。さて囮鮎のその後は・・・新たな囮も同じ運命を迎るのだ。万物の靈長とうそぶく人間は、なんとも身勝手で残酷。交「替」ならぬ交「代」が常用を離れて重い。外に「グラジオラスのアクセントはどう

こ新教師」、昭和の青春ユウモア小説の場面を思わせる。

「新教師」は新任の青年教師。生徒諸君いや諸姉かな

茶目つ気も過ぎてはいけませぬぞ。「グラジオラス」の口

昭七

調の奇妙に着目した一句。作者は英語のできる勉強家。

順番に下から咲いてくグラジオラス

有態に平談し、口語調ならではの俳味が滲む。グラジオラスの音調・音色がこれに添い、しゃかりきの句では得られぬ面白さがある。初端の「順番に」がいい。贋

である。余談だが、日頃、散歩する公園で、幼稚園児た

ちが滑台の横に並び、順番を待つてゐるのをよく見かけ
る、と、腕白な闘入者が現れ、みんなで「順番」、「順番」

と従わせる。ほほ笑ましい。互選、宏之助さんの目利きぶりに敬服。

一句鑑賞

増田陽一

田の神はいつ来て帰る蟾蜍

啓泰

神殿をもたない「田の神」は、田打ち、田植え、さなぶり、など稻作儀礼に応じて迎えられ、送られるのだそうである。暮蛙が水に入るのはただ交尾、産卵の時だけで、やはり田の神を気にしている。できれば人間が豊作を祈るのにあやかつて、蛙も子孫繁栄を願いたいのである。否否、暮蛙の方が土地の神とは付き合いが古く、人間の歴史以前からの顔見知りである。など蛙の方ではいいかも知れない。「蟾蜍」の文字の重々しさがよくあつていいようだ。

鮎つりの日がな竿さす思ひ川

多美子

解禁になつたらこの川で鮎を釣つてやろう、と念願していた想いの川でもある。終日、流れに半身浸つていて飽きない。「日がな竿さす思ひ川」との表現の滑らかさ。「思ひ川」の名は各所にあるけれど近くは筑波に行く途中にあつたのを思い出した。

川に立ち五体満足鮎を釣る

みち

急速に身を冷しながら佇立して鮎を釣る姿を見て作者は「あの五体満足そうなことよ」と感じたのである。何

という健康で明るい想念である」とか、と、読んでいて愉快になる。

ただ迅し流れも鮎もただ迅し

急流に鮎の踊る姿だけに絞つて、早いリズムの音楽のようすに情景を捉えた手腕が素晴らしい。鮎ではないけれどシユーベルトの『鱒』が聞こえてきそうである。

縄張りを守り守りて鮎釣られ

川の中の石に生える苔を食べる鮎にはそれぞれ縄張りがあり、他の鮎が接近すると激しく体当たりして追い払おうとする。この習性を利用するのが友釣りで、本能が人間の狡知に利用されるのである。掲句にはその鮎への同情がある。テリトリーを守る本能は可憐な蝶にさえあつて、オオムラサキ程になると小鳥さえ追い払おうとするのである。

とべら咲く岬の森や古社

(真鶴岬)

昭七

真鶴岬は3キロほどの小さい岬ながら見どころが多く、暖地性の樹木の茂りで独特の生態系がある。掲句は「とべら咲く」と、林中に朽ちて行く古社でその風情を表現している。古社は貴船神社か。「とべら咲き沖曇りくる水族館 白葉女」の句も、この岬かな、と思う。

紀子

朝雲白鉢巻の祖母なりき

巒鑠として家靈のような重みのある祖母、という存在も珍しくなった。白鉢巻、というと薙刀でも振りそうである。

幸一

高志

一句鑑賞—第50号—

増田陽一

相似たりモーツアルトの髪と薔薇

みち

戦前、小学校の音楽教室に並んでいた『樂聖』の肖像画はヘンデル、バッハから始まり、古の巨匠たちは髪形まで堂々として居たが、あれは髪であつただろう。ベートーヴェンは蓬髪で印象的であった。モーツアルトはどうだつたか思い出せないけれど、美しい音樂を続々と生んだ天才の髪ならば薔薇と競う、というのは成程、と思う着想である。列伝に付け足しのように若い滝廉太郎の顔がひとつあつたりして、何だか西洋文化の威厳を感じさせたものだつた。

山つつじ駅長客と顔なじみ

多美子

「駅長」と「顔なじみ」の取り合はせが小駅のある地域の心安さ、懐かしさを伝えて絶妙である。勝手な連想を許して頂けるなら、これは僕にとつて御岳山のケーブル駅そのものである。山の躊躇の咲くころが素晴らしい季

あるけれど、「朝雲」が微妙で、暑さの襲来に備えて身を引き締めたのか。「いつも二階に肌ぬぎの祖母ゐるかたは飯島春子」という不思議な句もある。こちらは作者の曾祖母で夏は肌脱ぎで晚酌した明治の女、今、多くの女性は若作り志向でありこのような『実存的老婆』も居なくなつた。

節で、花に来るミヤマカラスアゲハを探り、溪で鳴くコ

ルリの声を聞き、宿坊の庭でクマガイソウの花を見たりした。駅近くには山門や茶屋の人たちなど麓と行き来する住人も多く、掲句通りの雰囲気である。ついでに書くと、山を降りて行くと渓流を見下ろす酒場『まばごと屋』のテラスがあり、悦子と何度も飲みに行つたな、などと思い出に誘つてくれた句でありました。

花ひらの重なり捲れ薔薇開花

薔薇の花弁の重なりを即物的に言いとめた句であろう。即物的と言えば「捲れ」の措辞は山口誓子の『富士火口肉がめくれて八蓮華』の肉感のある描写に一寸似いで、生々しく開花の動きを表現している。

築地はも今年限りの初鰹

築地の魚市場も古くなり移転の時が来ているという。『初鰹』は江戸っ子の粋の見せどころであつたけれど、その伝統も遠くなつたという嘆きのごとくである。『築地はも』の語調にその嘆きが感じられる。

五月人形綿を噴きたる鯉抱いて

幸一

鯉を抱いた五月人形は金太郎さんか。人形が古くなつて鯉のぬいぐるみから詰め物の綿が噴き出したところ。

人形飾りには家族の歴史がある。息子さんの誕生のお祝いに贈られたのか、それ位の古さが似合いそうである。人形の傷みを見ていると過ぎ去つた歳月の感慨が迫つて

くるのである。

忠魂碑比島に果つと花の雨

昭七

忠魂碑というものを最近みないけれど、これには『陸軍何等兵何の某。フイリッピン、ルソン島にて名誉の戦死』何とかと言うような銘が刻まれて居たに違いない。『万朶の櫻か襟の色、花は吉野に嵐吹く、大和男児と生まれなば、散兵線の花と散れ』『尺余も銃は武器ならず、寸余の剣何かせむ、知らずやここに二千年、鍛へ鍛へし大和魂』と、何ともひどい陸軍の歌であつた。こんなに調子よくナンセンスな歌に乗せられて死んではたまらない。散つて行く花に、雨は涙を絞るように降つている。

苗売りのお店の帳場座敷にある

啓泰

野外にある店ではなく農家の土間で、そこの畑で育てた苗を頒けているのであろう。「座敷に帳場がある」とことに着目しただけで、和紙を閉じた毛筆書きの帳簿のあるような、地方の旧家らしいようすが目に浮ぶ。

ハガキ句（51報）管見

飯田孝三

闕伽井あり桜落葉の堆く

高志

闕伽井は仏前に供える水を汲む井戸。周りに桜の落葉が堆く積もつてゐる。「さ」は、さなえ、さをとめ、さつきに通じ、「くら」は、かみくら（神座）、いわくら（磐座）のそれ。即ち、桜の名は穀靈の意とか。万葉の昔か

ら詠われ、又、現代の作家、詩人にも桜を主題とする作品が多くある。閑伽井の佇まいと桜落葉の色彩が対照的。「堆く」が眼目。桜の美しさ、はかなさ、ときに潔さを愛で、称える“桜の精神史、文化史”上の所論の嵩みを象徴する如くである。蔵するところが深い。ともあれ、桜の美を嘆え、散るを惜しむのは、変わらぬ、日本人の“ここらうだろう。”だ

ハガキ句五十一報 (09/12/1)
小走りに下駄音帰る石踏の花 (一葉凹) 孝三
枯蓮の釘、鎌かすがいや遠きアラブ
寸も位置捨冬瓜の変ひやる
寿命てふ不思議な月日冬霞
山中に仏彌る音冬ぬくし
聖書説くゝゑ頭上より街師走
美少女が一人降りたり雪の駅
風花のうつらうつらとばう抜き
駅弁の蓋の飯つぶ冬日和
枯山に侏儒の乾きし笑ひ声
地下足袋の足を投げ出す小春かな
闕伽井あり桜落葉の堆く

ひろし

虎童子

羊三

華空子

圓子

山に

儒の

きし

かづひろ

璃子

敏子

高志

ちの

子

咲笑が

KaReYaMaNi S yu Z yuNoKaWaKiShiWaRa iGoe
枯蓮の釘、鎌や遠きアラブ
立枯れ、折れ曲がった蓮の茎は釘、鎌の形だ。釘、鎌に建材を繋ぎ合わせ、固定するもの。作者は、戦禍絶えぬアラブの地に思いを馳せ、平和の到来を祈る。「遠き」は距離・空間の隔たりであり、混迷の深さだ。「遠き」が臍。

地下足袋の足を投げ出す小春かな
自家栽培農園での一コマ。夫婦協働の作業一巡、さあ、一服しよ。ほのかに汗きだす疲れが快い。小春まぎれなし。「かな」が晴れやかで微笑ましい。

カラカラと響く。雲一片おかぬ晴天である。ふむ、侏儒は枯山の精だたか。「枯山」と「乾きし」は類義重複すると思うなら、理屈の虜囚たる証。収斂しつき抜け、枯山の本然に到れるを知るべし。能の玄妙と西洋お伽話の不思議をつき混ぜたようだ。面白い。又、リズムがいい。i 音の反復、なかんづく上五下五の脚韻 i の踏韻は、気韻透徹。「やまに」、「かわき」、「わらい」の a a i 音の畳みかけが開放感を高め、結「くゞゑ」で明るく和んで收まる。「かれやま」、「かわきし」の k 音の効果については、いわづもがな。ただ、一抹、箇抜けの淋しさがある。「ゑ」は鼻濁音。

駄弁の蓋の飯つぶ冬日和

かづひろ

飯粒の一粒、一粒がいのちの糧。昭和の子供たちは、飯は一粒残さず食べなさいと躾られた。でないと、お天道様の罰が当たると。「冬日和」がしみじみ有り難い。「冬日和」の斡旋が手練。出張の車中吟だらうか。

山中に仏彌る音冬ぬくし

山中に仏彌る音を聞く。気忙しい都会生活者は、瞬間、ふつと吾にかかる。「冬ぬくし」の安堵感がなつかしい。上五下五「うに」、「うし」の脚韻ⁱ音の踏韻がその思いを深める。

寿命てふ不思議な月日冬霞

虎童子

「冬霞」は、越し方を振り返る茫茫々の歳月だらうか。
〔月日〕は「冬霞」につらなる縁語。

寸も位置捨冬瓜の変らざる

ひろし

捨城、捨扇、捨石、捨鉢などは聞くが、捨冬瓜は知らない。生硬ではないか。下五上五の倒置を含む調べ全体が佶屈だが、敢えてそうしているのだろう。自嘲、超然の態を詠う。

(俳句雑信)

高志さんの「闘伽井あり」にたいへん感銘しました。精神性が濃く、ふところ深い。その他も、さすがにいい句ばかりで、読み手冥利に尽きました。こちらは一向にうだつがあがらずじまい。今年も暮、無常迅速を肌身に

するばかりです。ご夫妻ともども、ご自愛のうえ、よいお正月をお迎えください。来年も、なにとぞよろしくお願い申しあげます。

光成高志さま

飯田 孝三

(駄句近作)

尾頭のどつちこち海鼠口つぐむ

煤払ふつくづく御掌御蹕

山茶花の梢日移るばかりなる

(平21・12・20)

お便り広場 (到着順、敬称略)

白金霞五月号頂きました。毎月すばらしい出来ですね。私は五

月～七月半ばまでひま?のやうです。毎日のんびりでしよう。時折、年のせいで月日を間違っています。京成電鉄本八幡駅のそばに昔からの古本屋があり二回行つて昔からの喫茶店によつて帰りました。益々のご発展を祈ります。 (5/25 小山陽也)

白金霞五月号をお届け頂き御礼申しあげます。皆様の作品を拝見し、いつもながらわが身にひきかえ羨ましく勉強させて頂いています。我孫子日記を拝見して驚いております。吟行にゆかれる回数が多いこと・尊敬です。私など月に七句でお手上げなのに・恥ずかしい限りです。益々のご活躍をお祈り申上げ 御礼まで申上げます。

光成様 お久しうぶりです。いつも俳誌をお送り下さりありがとうございます。特に今月号の表紙の写真はパン・バスグラスのやわ

らかさとバシクの緑のコントラストが美しいですね。目の手術の後、風邪をひき一週間もつており今日やつと多美子さんの声をききました。

(5／31 倉田紀子)

P.S いつかいたいたツタンカーメンの豆が曳出しに残つており(食して残り10粒をとつておいたもの)植えました。ただ今20cmにのび楽しみ!ありがとうございました。

前略 先日、炎天寺に問い合わせたところ同封のような返事が来ました。八月15日はお盆の最終日で満員とのことで、他にあいている日が書いてあります。「白金葭」という句会で、田中哲也さんも居たことがあり、代表は光成高志さんと紹介しておきましたので、他の日にもし実行されるならば炎天寺に電話して頂けませんか。なお和尚は秀彦といいます。それではまた草々(平27・6・6増田陽一)(陽一さんの口利き有難うございました。早速、秀彦和尚に電話いたしまして八月六日の原爆忌の日にしました。和尚のすすめもあり、西新井大師を吟行して炎天寺に移り句会を致します。西東三鬼、桂信子などの短冊を見せてもらえるそうです。案内状は別途発送いたしますのでお待ち下さい。高志)

梅雨入り目前ですが、お忙しくお過ごしのことと思います。

1 五月例会の折に頂いた「築地市場吟行句会報」を拝見し、さすがに粒選りの句揃い、情景が一々目に浮び、つい同行した気分になりました。その一端を別紙の拙稿「吟行句鑑賞」に記しました。ご笑覧ください。なお、「猫車の唄」は、吟行句報中、敦子さんの「鰯

運ぶ」に悪乗りした、戯れ唄の限りです。

2 「白金葭」50号の一句鑑賞中、高志さんの「蛤や」の記述が散漫でかねて気に入らず、ほぼ全文にわたり手を加えました。併せて、幸一さんの「永き日の」および陽一さんの「蛤の椀」の一部を修正、加筆しました(傍線の箇所)。当方の原稿を直しましたので、今更恐縮ですが、お手許の原版を改め置きいただけたら幸いです(その他は変りありません)。

六月の例会の際、お手渡しするつもりでしたが、随分先になりますので、お送りいたします。記録づくめの異常気象つづきです。ご夫妻ともども、吳々も御身、大切に、ご健吟なされますようお祈り申あげます。(平27・06・05 飯田孝三)

(築地市場吟行句会報(二)を発行して参加者にお送りします。その際陽一さんにお世話になつた炎天寺吟行日を裏表紙に取り込んで案内することにしました。50号の修正版は右のお言葉通り原版を直すだけにとどめおきます。いずれ5周年記念号で日の目を見るものと思つております。高志)

築地吟行会報(二)頂きました。八月の西新井は欠席させて下さい。祖父は毎月参詣に行つてきました。半夏生も葉先が白くなりました。毎日半分眠りながら駄本を眺めています。世の中にはずいぶんいろんな本があるのにビックリしています。益々の御活躍を。(6・18 小山陽也)

拝復 ご無沙汰致しております。築地市場の吟行会報をお送り頂きましたがどうぞございました。八月の西新井大師の吟行会に参加さ

せていたゞきたくお願ひ申上げます。敬具（8・19五十嵐静秋）
紫陽花が梅雨にぬれ咲き誇つております。先日の築地での吟行
改めて添削下さり恐縮です。一字で句意が變りととのうこと勉強に
なります。八月吟行のこ案内頂きましたが、旧盆で墓参りなどあり
ちよつと予定が決まりません。お許し下さいませ。

（6・18 菊田比呂子）

先の例会ではお世話になりました。いつもながら新鮮な野菜を
戴きました。有り難うござります。築地吟行鑑賞の駄文では、お手
数をかけてしまいました。皆さんに見ていただけるとは幸いです。
「ふるさとは大き太陽青い隱元」「明るさの縁透きけりモロツコ隱
元」定期検診日が決まり、ご送信が遅くなりましたが、以上、六月
例会句の鑑賞拙稿をお届けします。気象不安定の砌、ご夫妻ともど
も御身ご大切にご精吟下さい。（平27・06・23飯田孝三）

受贈誌（H27年6月号）

森青蛙生みたての泡真珠光（彩123号）	平野ひろし
赤松の幹のあかあか梅雨信濃（リ）	
修学院離宮の景に春田打つ（リ）	
遅日なほ姉・三・六角・蛸・錦（リ）	〃
運転手スキーコミ込む夜行バス（飛行雲75号）	駿河岳水
三月にはや海開き宮古島（リ）	細川てつや
五年目の最後借り畠鉄入るる（リ）	和田正清芽
立ち時柏は枯葉付けしまま（あすか6月号）	山尾かづひろ

千枚田個々に光りし田水かな（東京クラブ6月） 万世遊
古置蠅虎をひとつ置き（リ） 璃子
迂回路は揚梅みのる遊歩道（リ）
生徒らの足跡残る千枚田（リ）
老鶯や風渡りゆく千枚田（リ）
こだま

飛行雲

75号駿河岳水主宰抜き

北原白秋

初詣がてら七味のやげん堀（白金霞47号） 飯田孝三

現俳ブログ俳枕 江戸から東京へ（227 & 228） 山尾かづひろ著

上野大仏に紅唇木下闇

街道の神輿の渡御について行く

飯田孝三

123号 平野ひろし主宰抜き

築地市場白子売場の清潔感

光成高志

蛤の椀一杯を白くせり

守啓

リ

武者昭七

恋の歌を読む二

片恋	北原白秋
あかしやの金と銀とがちるぞえな。 かはたれの秋の光にちるぞえな。	
片恋の薄着のねるのわがうれひ 「曳船」の水のほとりをゆくころを。 やはらかな君が吐息のちるぞえな。	
あかしやの金と赤とがちるぞえな。	

武者昭七

まず秋の夕日を浴びて散り急ぐまばゆいばかりのアカシアの並木が提示される。「かはたれ」は朝のさだかには見えぬかげをいうのが一般だけれど白秋は好んで夕景に使つた。「さしむかひ」一人暮れ行く夏の日のかはたれのそに桐のにほへるなど。以下「かはたれの秋の光」、「片恋のうれひ」「水」とそのほとりを行く「曳船」、恋人の「やはらかな吐息」と、主人公の周囲を囲むものはすべて、はかなく過ぎ行くもの、移ろうものの影であり氣配である。それは「片恋」のすがたそのものである。「薄着のねる」の呼覚ますものは我が身を包んでくるしづかなあきらめにも似たやわらかな感情である。それは恋人の漏らす柔らかな吐息とかさなりあう。「片恋」一篇の主題は片恋という痛みさえも甘美な情調としていつくしむ近代の退廃である。ここには激烈な感情の爆発も慟哭もない。静かな嘆きと諦念だけがある。移ろいゆくもののはかなげな影、小唄調の物憂げで、けだるげなリズム、ネルの柔らかくやさしい感触、それらがはじりあつて片恋の切なさを見事に浮き立たせた象徴詩の傑作である。

我孫子日記

* 五月晴日暈の下の列にある

高志

象の貌怖
いぞ乙巻冷
房 館

	5/15	例会	1068
	5/20	SOA	
	5/24	アピスタ	
	5/26	銀座	
	5/27	SOA	
	6/3	SOA	
*	6/4	鳥獣戯画展	
	6/5	「鮎」を見る	
	6/6~6/7	6/6~6/7 洒水の滝 &酒匂川	
*2	6/10	SOA	
	6/16	銀座	
	6/17	SOA	
	6/19	例会	
表紙の題字・加納綾女。写真		白金蔵	52号
発行所		編集・発行人	光成高志
丁 270		(TEL & Fax)	1119
我孫子市南新木2			
6月26日		6月14日	平成27年6月発行
の白金蔵		17	7187

*2 飛び込みの戯画の兎の水遊
相撲して勝ちし蛙の大きこと
幾筋の縦の水なり瀑布かな
函の中廻を待てる鮎かなし
滝の道無人販売実梅あり
釣れてすぐ囮鮎とし川泳ぐ

みち 高志 みち

編集後記

孝三さんの鑑賞文絶好調です。啓泰さんの御句、田の神の名代たる蟾蜍に挨拶されておられる。昭七さんの御句、忠魂碑の句の陽一さんの鑑賞文にも驚きました。あんな陸軍の歌があつたのですね。ひろし先生一行の修学院離宮吟行句を読んで又拝観したくなりました。桂離宮、修学院離宮は田舎少年の憧れでした。その美を賞賛したタウトの旧居が高崎の達磨寺にあるとか、先ず此処から訪ねてみよう。皆さんで吟行がてら訪ねられればと、こんなことを思いながら編集しました。ここでお終いにしようとしたら、松山市から

「宿直室は畳八枚花の雨」（みち）が特選になつたと賞品入りのメール便が届いたので敢えて追記しました。